

巻頭言

遺跡の発掘などで古代の人々の多様な生活や知的遺産が明らかとなっている。古来より、人は探求や工夫、創造の心と力を持ち、それらを使うことで、各人の生活が成り立っていたように思われる。換言すれば、より良きものと未知のものを求める欲求に突き動かされ、幾度も研究され試行錯誤を繰り返した結果により、現在が築き上げられたと言える。

つまり、パスカル (Pascal,B.,1623 ~ 1662) の「人間は考える葦である」という言葉をまさに実践してきたのである。

研究が、疑問や問題に答えるために科学的方法によって実施する組織的探求と定義するならば、ここでの科学とは単に自然科学的なことだけを指さず、人文・社会学の分野のいずれもが科学的方法といえるだろう。英語の研究に該当する言葉には、一般に study, survey, research などが使用されるが、なかでも research は新しい知見の探求を目的とする科学的・学問的研究に対する言葉にあたる。一方、study は特定の状況での当面の問題を解決することが目的である問題解決的アプローチに対して使用されることが多い。さらに、survey は公的な実態調査などによく使われる。これら study, survey, research は、相互に関連して真理を探究していく。たとえば、事例研究 (case study) などの問題解決的アプローチが仮説を産生し組織的 research を導くことも、逆に research の知見を活用して問題解決を図ることもある。このように、実際には様々なレベルの研究手法が必要となる。

しかし、妥当な新知見を得るための研究とは、やはり究極的には research であろう。

研究は科学的な方法を用いて行う探求であるとしたが、では科学的研究方法とはどのようなものなのだろうか。科学 science の語源はラテン語の scientia であり、sio = to know 知るの名詞形で、知識のことである。科学的知識は、「もし～ならば」という形で導き出される体系的知識であり、経験的事実による論証過程をもつ。科学的方法とは、この論証過程を指すものだと考えられる。

ポッパー (Popper,K.R.,1902 ~ 1994) は、科学の方法は普遍の認識に人間を限りなく接近させるものであるとして、次のように述べた。

科学の結果は相対的なもので - それは科学の発展上、ある段階到達地点でしかなく、科学がそれ以上進んだ段階では、もはや優位に立ちえない。だが、それは真理というものが相対的なものだということにはならない。もし、ある主張が真理であるなら、その主張は永遠に正しい。

要するに、この指摘によれば、常に探究し続けることが真理に近づくことなのだということ。とかく、研究というのは底知れぬ深さと果てしない広さを有するものである。本ジャーナルが、その役割を担うためにますます洗練・充実されることを期待している。

なお、「滋賀医科大学看護学ジャーナル」の巻頭言は紀要編集委員会の委員長が執筆されてきたが、今回は委員長よりのご依頼を頂戴したことで、お引き受けした次第である。

看護学科長 瀧川 薫